お　わ　り　に

今年もまた研究発表会を2月に開くことになった。この時期は季節的にみて決してよい選択でないのだが、やはりこうなってしまった。お出で下さるかたがたにはとても不便な思いをさせることになり、とりわけ、遠方からのお客さまには申しわけないのだが、お許し願いたい。

実は、季節的なデメリットといえば、そうした交通面のことに加えて、生徒たちがカゼをひいて欠席し、大事な公開授業が計画どおりにできなくなるという恐れもある。事実、それで大慌てした研究発表会も過去にあった。今年は、発表会の当日に大雪が降ることのないよう、またその頃にカゼがはやることのないようにと願っている。

ただ、この研究紀要は、研究発表会と一体のものであると同時に、別のものとして、これだけを読んで頂けるものでもあり、実際、遠方にいて、この紀要だけから私たちの実践を承知して下さるかたも多いと思われるから、その点では、2月という時期のまずさも救われる気持ちがする。そのことよりも、この紀要を読んで、遠方からご意見を寄せて下さるかたが、まずいないということの方が、私たちには心残りなのである。

そういうわけで、自分たちの研究をよりいっそう高いものにするために必要な批判というものは、自分たちの中でなされなければならないことになる。今回のとり組みの中で私たちが得たと確信したものは果たして本当のものだったのだろうか。ただ、成果があったように感じただけではないのだろうか。また、確かに生徒たちひとりひとりに一定の「伸び」があったとしても、それは「伸び」を生むべき必然的な指導がなされたからではなくて、ただの「ホーソン効果」であったのかも知れない。

ひとつの組織が意欲的にある目標に進んでいるときは、その目標追求の手段が最適のものでなくとも、いや、ときにはその手段が逆方向のものであっても、高揚した気分から当初の目標が達成されることがあるという。これを実験の場の名にちなんで「ホーソン効果」と呼び、教育実践における因果関係の評価のさいに十分注意すべきだとする教えがある。

さて、「ホーソン効果」は長続きせず、しばらくするとまたもとに戻ってしまうというが、私たちは、今次のとり組みを続けていくことでひとりひとりの「伸び」を確かなものにし、さらにいっそうの成長を促していこうと思う。徒らに不安を抱くのではなく、むしろ期待と確信を持って、生徒たちの将来を見守っていくつもりである。